『古事記』神話を読む
－いろいろな愛の形－

外国語学部　国際文化交流学科４年
平井　友梨

はじめに

古事記神話には様々な神様が登場し、様々な恋愛模様が描き出されている。そのひとつひとつは実に深く、様々なことを考えさせられる。この神話を単なる物語として読むならば、そのひとつひとつの恋愛の意味を知ることはできないだろう。なぜならば、端的にあらわすと、今でいう恋愛小説や恋愛漫画のように、誰かと誰かが付き合い始めやがて結婚し、しかしうまくいかず最終的には離婚してしまうような物語展開になっているからだ。しかし、私はこの神話を単なる恋愛物語として読むのではなく、そのひとつひとつの愛を深く読み、登場人物（ここでは神様）の思いをくみ取っていきたいと考える。人が違えば愛の形も変わるように、登場する神様が違えばその愛の形も変わってくるだろう。

また、この古事記神話には男女の恋愛物語だけではなく、その他の愛の形も描かれている。それは、親子の愛ときょうだいの愛である。

私が本論で述べたいことは、神様の様々な愛の形についてである。まずは、イザナキとイザナミによる恋愛、次にイザナキとスサノヲによる親子の愛、最後にスサノヲとアマテラスによるきょうだいの愛をとりあげていく。

そして、これらの愛があらわしている本当の意味を読み取っていきたい。さらに、『古事記』で語られている愛の形は、現在の愛の形と比べてどこか違いがあるのだろうか。この点にも注目して神々の愛の形を読み取っていきたい。

１-１．イザナミとイザナキの誕生

宇宙の初め、混沌としたものの中から天と地が初めて分かれたとき、高い天上の聖なる世界である高天原から、単独神である三柱の造化神（1）と二柱の神（2）が成り、この五柱の神々は別天つ神として特別に扱われた。次に、単独神として二柱の神（3）が成り、その後男女ペアの神々が成り、この最後にイザナミとイザナキ（4）が成った。二柱の単独神と男女ペアの五柱の神々を合わせて神世七代という。

こうしてイザナミとイザナキは成り、別天つ神の仰せで、漂いまだ整っていない国土を固めることとなる。天つ神から与えられた、玉飾りの施された聖なる呪器である天の沼矛で於能碁呂島（5）をつくり、その島に聖なる御柱と宮殿を見立て、そこで二人は結婚し国生み、神生みを始めるのである。

国を生み終え、神生みを始めた二人であったが、イザナミが火の神である火之迦具土神を生んだ際にその陰部を焼かれ病を患ってしまう。その後も神生みを続けるが、火の神を生んだことが原因でとうとう死んでしまう。イザナキは愛しいイザナミを亡くした悲しみのあまり、嘆き苦しみ、子である火之迦具土神を殺してしまう。そして、イザナミを求め黄泉国まで訪れるのである。

以上がイザナミとイザナキの神話である。二人の愛の深さはどれほどまでなのか。二人はお互いをどのように思っていたのか。ここからは、参考になる文を紹介しながら、私の考えを述べていく。

１-２．イザナキとイザナミの恋愛
―イザナミの死

まずは、イザナミの死の場面から二人の愛を読み取っていく。

イザナミの死後、イザナキの様子として、次の

ように語られている。

故、爾に伊耶那岐命詔りたまはく、「愛しき我がなにも妹の命を、子の一つ木に易いへむと謂へや」とのりたまひて、乃ち御枕方に匍匐ひ、御足方に匍匐ひて哭きし時、(p.61)

イザナキはその妻の体の周りを徘徊し、泣き伏していたとある。当時、死者の周りの徘徊する行為は死者に対する儀礼的所作であった。また、愛しい妻をどうして一人の子に代えることができるかと、嘆いている。このことから、イザナキは生まれた子よりも妻を愛し、妻に対する愛を泣きながら周りを回ることで示している。また、

是に伊耶那岐命、御佩せる十拳剣を抜きて、其の子迦具土神の頸を斬りたまひき。(p.61)

このように、イザナキはイザナミの死の原因であるその子を斬り殺した、と語られている。なぜ、イザナミが苦しみながらも生んだ子を殺すのか。それは、イザナキのイザナミへの愛がそれほどまでに大きく強いものだったからではないかと私は推測する。死んでいても「愛しき」と称し愛をあらわし、子を殺すほどにイザナミへの愛が大きかったのだろう。

1-3．イザナキとイザナミの恋愛 ―イザナキ、黄泉国へ。イザナミとの再会

イザナミを求めるあまり、黄泉国へ赴くこととなったイザナキ。次に、黄泉国での再会の場面から二人の愛を読み取っていく。

黄泉国に到着したイザナキは、イザナミに対して次のように述べている。

「愛しき我がなにの妹の命、吾と汝と作れる国未だ作り竟へず。故、還るべし」(p.64)

イザナキはイザナミと共に、未だ完成していない国作り（国生み）を再開させたい(6)と願い、その旨を伝えている。この言葉に対し、イザナミは、

「悔しきかも、速く来まさずて。吾は黄泉戸喫為つ。然れども愛しき我がなせの命、入り来坐せる事恐し。故、還らむと欲ふを、且く黄泉神と相論はむ。我をな視たまひそ」(p.64)

このように、イザナミがわざわざ黄泉国まで来てくれたことを恐れ多い(7)と思い、共に還る事を決意する。しかし、黄泉神と相談して決めなければならないため、その旨を伝えている。

ここでの二人のやりとりからは、確かに二人の間に生前と同じような愛がある事がわかる。お互いを「愛しき」と称し合い、イザナキは、また共に国生みをしたいと願い、イザナミはその思いにこたえようとしている。イザナキのことを愛しているからこそ、黄泉国の食べ物を口にし、もう戻れないとわかっていても黄泉神にかけあい、なんとか共にいたいと思っていることがうかがえる。この場面では確かに二人の愛は存在する。

しかし、ここで一つの疑問が生まれてくる。イザナミは生きている間はイザナキにとって確かに美しく愛しい姿であっただろう。だが、死んで黄泉国の住人となったイザナミは、はたして生前と同じ姿なのだろうか。イザナミは御殿の鎖し戸から出て、イザナキと再会する。鎖し戸とは、「錠のかかる戸」という意味(8)であり、つまりイザナミは戸を閉ざして外に出、イザナキと再会したこととなる。イザナミは、イザナキを御殿の中に誘うようなことはしなかった。また、佐藤正英が〈神の女〉〈神の子〉の物語を説いた著書(9)では、次のようにある。

〈神の女〉イザナミの美しさは、……意識によって統括されている在りようにおけるもの神との即融がもたらした形姿の美しさである。

死によって意識による統括が失われ、即融していたもの神がイザナミの肉体において醜悪な形姿で顕わに現出したのである。……黄泉国の宮殿の内では意識による統括を失い、本来の在りように戻らざるをえないことをイザナミは知っていた。

イザナミの美しさは死によって失われ、黄泉国の御殿の中では醜悪な姿となる。しかし、御殿の外であれば生前のような美しい姿を保つことができるのだ。生前と同じ美しい姿でイザナキに会うためには、御殿から出て再会するほかなかったのであろう。なぜならば、御殿が本当の意味での黄泉国であると、私は考える。だから、イザナミはイザナキを御殿に誘うことなく、鎖し戸の外で再会したのだ。また、黄泉神のもとへ向かうイザナミが、決して覗いてはいけない、とイザナキに忠告していることからも、御殿の中では黄泉国での本当の姿となってしまうことを知っていることがうかがえる。そしてもうひとつ、まだ生きているイザナキを死の世界である黄泉国に、本当に足を踏み入れないようにするためでもあるのだろう。

以上のことから、イザナミは御殿の外ではイザナキを意識し、生前の美しい姿を保つことができるが、一歩御殿に入ってしまうとその意識は失われ、たちまち醜悪な姿へと変化してしまうことがわかる。イザナミはイザナキへの愛から、本当の死の世界へ踏み込ませないために、御殿の外で生前と同じ美しい姿で現れたのだろう、と私は考える。

さて、このイザナミとイザナキの愛の形はハッピーエンドというわけではなく、この後二人は別離することとなる。なぜならば、次のようなことが起こるからだ。

> 如此白して其の殿の内に還り入りし間、甚久しくて待ち難ねたまひき。故、左の御みづらに刺せるゆつつま櫛の男柱一箇取りて闕きて、一つ火燭して入り見たまひし時、(p.64)

覗いてはいけないとイザナミに忠告されていたにも関わらず、イザナキはあまりの時間の長さに耐えきれず、その中を覗いてしまう。そして、この行為に対してイザナミは、次のように述べる。

> 「吾に辱見せつ」とまをして、即ちよもつしこめを遣わしめき。(p.65)

醜悪な姿を見られたイザナミは、恥をかかされたと感じ黄泉国の醜女たちを遣い、イザナキを追いかけさせるのである。そして、二人は最後に別離の言葉を言い交わす。

> 伊耶那美命言さく、「愛しき我がなせの命、如此為ば、汝の国の人草、一日に千頭絞り殺さむ」とまをしき。爾に伊耶那岐命詔りたまはく、「愛しき我がなに妹の命、汝然為ば、吾一日に千五百の産屋立てむ」とのたまひき。(p.66)

イザナミはイザナキの国の人びとを一日に千人殺すと言い、イザナキはそれならば一日に千五百の産屋を建てると言う。ここに二人の愛は存在するのか。イザナミはイザナキに見られたくはない醜悪な姿を見られ、恥をかく。イザナキは、美しかったイザナミが、醜悪な姿となっていることに怖れを覚え、逃げ出した。このようになってしまったのは、互いを思いやる愛ゆえだと私は考える。イザナミは、愛ゆえに、醜い姿をさらしてイザナキをがっかりさせたくないと思い御殿の外で会い、共にいたいと願うから黄泉神にかけあおうとした。イザナキは、愛ゆえに、早く共に還りたいと願ったために、待ちきれない思いがあった。こうした愛の形が招いた結果が別離ということになってしまったのだろう。もし、愛がなく憎しみのみがあったのならば、最後の時までお互いを「愛しき」と称さなかっただろう。また、佐藤正英もその著書(10)でこの別離を次のように述べている。

> 「愛し」という措辞はたんなる挨拶の常套句ではない。対を形作っている対手への過剰とも見える激しく強い恋慕の情の表出である。イザナキとイザナミは、決定的な別離を不可避な在りようとして受け容れざるを得ない事態に遭遇してもなお、互いに対する恋慕の情が衰滅していないことを確かめ合う。

このように、イザナミとイザナキはたとえ別れなければならない状況においても、本当のところにはお互いを愛し合う気持ちが存在していたのだろう。きっと、この場面での二人の心境は言葉に

は表せないほどの複雑な愛が存在していたのだろう。

2．イザナキとスサノヲの親子の愛

ここからはイザナキとその子であるスサノヲの親子の愛について読み取っていく。

黄泉国から戻ったイザナキは、その身体の穢れを落とすために禊を行う。この過程で生まれたのがアマテラス・ツクヨミ・スサノヲである。イザナキはそれぞれに高天原・夜の世界・海原を治めるように委任する。しかし、スサノヲだけはこの仰せに従わずにいた。なぜ従わなかったのか。理由は次のとおりである。

> 「僕は妣の国根之堅州国の罷らむと欲すが故に哭く。」(p.73)

スサノヲは母親（つまりはイザナミ）のいる黄泉国に行きたくて泣いている、というのだ。これに対してイザナキは、次のように答える。

> 爾に伊耶那岐大御神大く忿怒りて詔りたまはく、「然らば汝は此の国に住むべからず」とのりたまひて、乃ち神やらひにやらひ賜ひき。(p.73)

イザナキはスサノヲの黄泉国行きを認めず、怒り、国から追放してしまった。なぜ、イザナキはスサノヲの願いを聞き入れず、追放してしまったのか。ここに親子の愛はあるのか。私は、愛があるからこそ追放したのだと考える。

黄泉国へ行けば確かに母であるイザナミに会うことはできるが、その場所は死で穢れている。そのような恐ろしいところにわざわざ息子を送り込む親がいるだろうか。いや、いないだろう。黄泉の穢れがスサノヲに移ってしまうことを恐れたことが一つの要因だろうと私は考える。

また、もう一つの要因として、スサノヲだけが愛しき妻、イザナミに会いに行くことへの嫉妬心もあったのではいかと推測する。イザナキとイザナミの愛の深さは、先に述べたように別離しても存在しているものだ。つまりイザナキは、愛しきイザナミに会えることならば会いたいが、穢れている黄泉国には行きたくないと思っているのだろう。そこに、子であるスサノオが、母に会いたいがために任せた国を統治せず泣いてばかりいるのだから、当然イザナキは怒るだろう。佐藤正英のその著書 (11) にも、イザナキの怒りの理由を次のように述べている。

> 「妣の国」に往きたいというスサノヲの発した言葉は、イザナミと対を形作ることを断念せざるをえなかった痛みをあらためてイザナキに想起させる。スサノヲの過剰な希求は、イザナキにとって他人事ではなく、自身が内に押しこめた希求でもある。……しかし、世俗時空である葦原中国を整序するには過剰な希求を内に押しこめ、断念するほかに手立てがなかった。その痛みがスサノヲに対する怒りとなってイザナキを捉えるのである。

イザナキ自身の、イザナミに対する愛を抑えることができなかったために、スサノヲにあたってしまった、ということなのであろう。ここには、親子の愛というよりはイザナキのイザナミに対する愛の残像が映し出されている。

そしてもうひとつ、一番親子の愛が感じられる要因として、あえて追放することでスサノヲを自由にした、ということも考えられる。自由にすることで、お前の好きなようにしなさい、という一種の愛情が感じられる。ここには親の、子に対する愛が感じられる。追放という行動には、イザナキなりのスサノヲに対する愛情が込められているのだろう。

3．スサノヲとアマテラスのきょうだい愛

最後に、スサノヲとアマテラスのきょうだい愛について読み取っていく。

海原から追放されたスサノヲは高天原を統治している姉のアマテラスのもとへ行くこととなる。スサノヲはその巨大な力の為 (12) に、大地を揺り動かしながら高天原へ向かったため、アマテラ

スはスサノヲが高天原を奪いに来ると思い武装して待ち構えている。この場面は次のようにあらわされている。

> 乃ち天に参上る時、山川悉に動み、国土皆震りき。爾に天照大御神、聞き驚きて詔りたまはく、「我がなせの命の上り来る由は、必ず善き心ならじ。我が国を奪はむと欲すにこそあれ」とのりたまひて、(p.74)

アマテラスは、スサノヲのその巨大な力に怖れをいだき、きっと荒らしに来るに違いないと思いこんでしまう。この時の彼女の心境としては、弟に対する愛というよりは恐怖心や対抗心のほうが大きかったのであろう。でなければ、武装して待ち構えてはいないだろう。

しかし、スサノヲの思いを聞き反逆心はないとわかると、アマテラスは徐々にスサノヲに対する愛を深めていく。アマテラスのスサノヲに対する愛が一番顕著に表れている場面は次の場面である。

> 故、然為れども天照大御神はとがめずて告りたまはく、「屎如すは酔ひて吐き散らすとこそ我がなせの命如此為つらめ。又田の阿を離ち溝を埋むるは、地をあたらしとこそ我がなせの命如此為つらめ」と詔り直したまへども、(p.80)

スサノヲの心の清らかである事を証明するため、誓約 (13) を行った結果、スサノヲが勝ち、彼はその勝ちに乗じて荒ぶれてしまう。そんな弟のひどい行動を、言いなおしている場面である。

なぜアマテラスはスサノヲの荒れすさぶ行動を容認できたのか。それは、やはりスサノヲに対する愛がそこにあったからではないだろうか。スサノヲ自身は誓約をする前、アマテラスのもとを訪れた理由を話し、自分には反逆心はないと強く主張している。ただ純粋に思いを伝えていたのだろう。そして、誓約の結果スサノヲは女神を生みだし、自らの清明心を形であらわすことができたことに喜んだ。しかし、スサノヲは勇猛な気質を持つ神である。その感情の強さで周りに大きな影響を及ぼす力を持っているのである。そのため、この勝ちの大きな喜びの感情が、結果としてアマテラスの耕作する地を荒らしてしまうこととなったのであろう。スサノヲには本当に邪心はなく、純粋に感情をあらわしているのだ。アマテラスは、この純粋さを感じ取り寛容にスサノヲと接していたのだろう。それは、つまり姉が弟を思いやる愛情なのではないだろうか。私はこう感じる。初めはスサノヲの力の強さを容認することができなかったが、その純粋さを知ることでその気持ちもなくなり、次第に姉としての愛が芽生えたのではないだろうか。

おわりに

イザナキ・イザナミの恋愛観から読み取れることは、お互いがお互いを何かしらの形で愛し合っている、ということだ。特に深く二人の愛が感じられる場面は、二人が生きている時ではく、イザナミが死に、イザナキが黄泉国へと訪れたときであると私は考える。イザナミが死に、イザナキはその悲しみと愛の形を、その子を殺すという行為で示している。また、イザナキが黄泉国へ訪れたとき、イザナミのことを「愛しき我がなに妹の命」と表現している。イザナミの側から見てみると、イザナキの言葉にこたえるように返答をしているところや、イザナキのことを「愛しき我がなせの命」と表現しているところに愛を感じる。言葉や行動でお互いの愛を表現し、その愛にこたえようとしている部分が多く見受けられる。さらに、最後の別離の場面では、避けることのできない運命をお互いが受け入れ、愛があるけれども、もうその愛にお互いがこたえられない状況になってしまったことを理解しているように私は感じ取った。

二人の愛の形は、初めから最後まで深く強いものであり、最後の時までお互いを思いやることができるほど太いものなのだろう。

イザナキとスサノヲの親子の愛から読み取れることは、言葉にせずに親が子を思う気持ちである。イザナキはただ一言「追放する」という言葉だけをスサノヲに伝えた。スサノヲがその本当の意味を理解したかはわからないが、イザナキとしては

その一言にたくさんの愛情をこめたのだろう。親が子を思う気持ちは神様も人間も同じなのであろう。

最後に、スサノヲとアマテラスのきょうだい愛から読み取れることは、弟を思う姉の寛容さである。弟の本当の思いを理解することが、姉の弟への愛情なのであろう。

『古事記』で語られているさまざまな愛の形について、イザナキとイザナミ、イザナキとスサノヲ、スサノヲとアマテラスと三種類の視点からみてきた。そのどれもが深い意味を含んでいた。さらっと読んでしまっていたら、絶対に読み取ることのできない感情がたくさん詰まっていたように感じる。それは、言葉の一部であったり行動の一部であったりと、様々だ。

それぞれの愛があらわす本当の意味とは。それは、何が起きても愛の感情は変わらずにそこに存在し続けること、たった一言にすべての愛情がこもっていること、そして、察してあげることなのではないだろうか。

『古事記』は日本最古の歴史書と言われるほど古い書物だが、描かれている愛の形は現在とさほど変わりがないように感じる。純粋な恋愛模様、親が子を思う気持ち、姉が弟を思う気持ちは今も昔も変わらずに在り続けてきた感情なのであろう。このように、『古事記』で描かれている愛の形は、今の私たちが読んでも理解できるものばかりだ。神様の愛だからといって特別なものではなく、私たち人間と同じような感情を持ちながら愛をあらわしている。そういう意味では、いつの時代もどんな種類の人間(ここでは神様であろうとも)でも、愛は変わらずに在り続けるのだろう。

脚 注

【一般注】

原文『古事記』からの引用は全て、荻原浅男・鴻巣隼雄『日本古典文学全集　古事記　上代歌謡』(小学館　昭和48年)によるもの。引用文には、ページ数のみ示す。

【注】

(1) 天の中央にあって天地を主宰する至上神である天之御中主神と高く神聖な生成の霊力を持ち万物を生成する至上神の高御産巣日神、神々しく神聖な霊力を持つ神産巣日神のことを指す。

(2) 葦牙の生命力をもった宇摩志阿斯詞備比古遲神と天上が恒久に存立するようにと予祝する心をこめた天之常立神を指す。

(3) 国土が永久に存立するようにと予祝する心をこめた国之常立神と天地の間に漂う雲のような状態が生成することを示す豊雲野神のことを指す。

(4) イザナキ・イザナミの「イザナ」は「誘う」の意味で、完全に身体の整った神として互いに誘い合い結婚した。

(5) おのずから凝り固まった島という意味で、国土の修理固成の拠点となった聖なる島である。

(6) 国作りが未完成なのは、国を生むだけが完成ではなく、神生みを完成し、国土経営を完成させる必要があったからだ。

(7) ここでの「恐れ多い」は「こわい」という感情ではなく、「もったいない」という感情。

(8) 山口佳紀・神野志隆光『新編古典文学集1 古事記』(小学館)によると、原文の「膝戸」はサシトと読む説が有力であり、そうすると錠のかかる戸という意味となる。したがって、戸を閉ざして外に出、出迎え方により殿の中には入れないという意味となる。

(9) 佐藤正英『古事記神話を読む〈神の女〉〈神の子〉の物語』(青土社 2011年) p.61。この本からの引用は、私の考えを補ってくれるものであると判断したものである。以下同様。

(10) 上に同じ p.64。

(11) 上に同じ p.109。

(12) スサノヲは勇猛敏速に荒れすさぶ男の神様であり、暴風・農耕・植林・治金などの神としての属性を持つ。その暴風神としての性質ゆえに、泣きわめいていた時には次のように表現されている。

「其の泣く状は、青山は枯山如す泣き枯らし、河海は悉に泣き乾しき。是を以ちて悪しき神の音、狭蝿如す皆満ち、万の物の妖悉に発りき。」(p.73)。

(13) あらかじめ神に事の結果を誓い、そのとおりの験が現れるか否かで神意を知る卜占いの一種である。この場合は、生みだされる神の性別によって勝敗が決まるようになった。結果として、アマテラスは男神をスサノヲは女神をそれぞれ生みだした。